様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１７４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０４８２３

研究課題名（和文）近世九州における彫物の独自性に関する研究－伝播経路による検討－

研究課題名（英文）Study on the uniqueness of shrine carvings in early modern Kyushu -the route of transmission.-

研究代表者
伊東　龍一（ITO, Ryuichi）

熊本大学・大学院先端科学研究部（工）・教授

研究者番号：８０１９３５３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　近世九州地方の神社等にみられる彫物（建築装飾）は、優れた表現や技法が、他地方よも早くからみられる傾向があるので、その伝搬経路を検討した。
　熊本県球磨地方にみられる意匠性の高い薄肉彫は、湯前町の御大師堂須弥壇羽目が最古例で、制作した関東常州住の権大僧都・賀吽（頼源）は、常州真言宗・雨引山楽法寺に関連する僧とみられるので、意匠・技法は関東からもたらされたことになる。太宰府からの伝搬を跡付けられなかったが、鹿児島の龍柱にはやはり琉球や大陸からもたらされた可能性が想定される。また、熊本北部の大彫物は18世紀以降新たな展開をみせ、大分市には大型パネル状彫物を採用した江戸初期の事例も新たに見いだされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近世初期に文化的に大きな中心とみなされていた近畿地方ではなく、九州地方に独自の彫物の意匠・技法が伝えられた一つの経路として、琉球等の海外の他に関東地方からであったことを指摘できたことの意義は大きい。一般的には徳川家康が入る前の関東には文化的に見るべきものがないと思われている関東にこれだけの優れた技法・意匠をもった彫物がは含まれていたことは注目に値する。

研究成果の概要（英文）：Carvings (architectural decorations) seen in shrines and other places in the early modern Kyushu region tend to show excellent expressions and techniques earlier than in other regions, so we examined the route of their propagation.The oldest example of thin-walled carving that can be seen in the Kuma region of Kumamoto Prefecture is the carvings of the Odaishido in Yunomae Village by Gaun.
Gaun (Raigen) who lived in the Kanto region, is believed to be a monk associated with Rakuho-ji Temple of the Shingon sect of Buddhism in Ibaraki Prefecture, so the designs and techniques were brought from the Kanto region. Although it was not possible to trace the introduction from Dazaifu, it is assumed that the dragon pillars of Kagoshima were also brought from the Ryukyus and the continent. Large carvings in the northern part of Kumamoto showed a new development after the 18th century, and in Oita City, a new example from the early Edo period using large panel-like carvings was found.

研究分野：日本建築史

キーワード：彫物　江戸時代　九州　建築　伝搬経路

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

近世の寺社建築を彫物（彫刻装飾）の豊かさという特徴については、それに先立つ時代である室町から桃山時代にかけての神社の装飾性について稲垣栄三『原色日本の美術　第16巻　神社と霊廟』（小学館 1968年）が描き出していたし、大河直躬『桂と日光』（平凡社 1964年）は日光東照宮に注目して早くから指摘していたが、昭和50年代から60年代前半にかけて全国で行われた近世社寺建築緊急調査を契機に大いに注目されることになった。具体的には、大河が取り組んだ信州・立川流大工の研究や常州花輪・田沢地域の彫物大工に関する応募者の調査・研究など、各地の特色ある彫物と、彫物を多用する建物の造営活動に関わった工匠についての報告が続いた。

九州においても、彫物を中心とする装飾性の高まりがある点では他の地方と異なるところはない。しかし、この地方の建築の装飾性に着目した研究はほとんどなかった。その中で、応募者は、熊本県の阿蘇神社（熊本県一宮町）や青井阿蘇神社（同人吉市）、鹿児島県の霧島神宮（霧島市）、大分県の柞原八幡宮（大分市）や現在取り組み始めた太宰府天満宮等（福岡県）の建造物調査を通じて、九州では彫物が建築に用いられ始める時期が早く、構図の取り方や題材の選択には独自性がみられるのではないかと考えるに至った。

青井阿蘇神社幣殿(国宝　慶長15年　1610)の小壁にみられる写実的な花鳥の薄肉彫は、間に立つ柱を超えて連続的に横に図柄が繋がる先進的な構図を取る。このような彫物は、当時の江戸や上方にも見当たらない。日光東照宮（寛永13年　1636）でも、陽明門の、それも時代の降る寛政年間に取り付けた「牡丹」の彫物にしか見ることができない。

また、柞原八幡宮の、元和９年（1623）再建の南大門には花鳥を中心に霊獣や人物を彫る５尺×1.5尺の彫物39枚があって（「由原八幡宮奉南中大門造営事」『大分県史料（9）大分諸家文書』1956年)、同時代の久能山東照宮（元和３年　1617）にも見られない大彫物が使用されていた。さらに元禄９年（1696）建立の熊本県八代市の八代神社本殿では、霊獣のダイナミックな表現と、反対側まで彫り抜く「浪」の木鼻の表現は、明治時代の作かと見紛うばかりである。正徳５年（1715）の鹿児島県の霧島神宮本殿には、向拝柱に龍と瑞雲が巻き付く「龍柱」が用いられる。「龍柱」は霧島神宮を嚆矢として、鹿児島神宮をはじめとして鹿児島や宮崎南部の範囲に存する神社本殿に見られる。「龍柱」は、彫物が取り付く時期としては特に早い時期のものではないが、極めて巨大な彫物である点に特色がある。早い時期の大彫物としては、他に熊本県大津町の元禄14年（1701）建立の中島日吉神社本殿がある。注目すべきは妻で棟木を支持する力神で、裏に元禄14年（1701）に熊本県山本郷（現在の植木町）の大工棟梁の手になることを証する墨書が見出された。軒下の四隅を支える小型の力神は各地にあるが、18 世紀のごく初期の彫物としては極めて大きい。

ところで、御大師堂（熊本県湯前町）の須弥壇羽目板は「獅子に牡丹」「蒲に鯉」等の薄肉彫が実に大らかで質が高く、墨書から天正９年（1581）に、意外にも関東の「常州」の賀吽が彫ったことが判明する。この薄肉彫の技法は、その後周辺の生善院観音堂（寛永２年　1625）の厨子や十島菅原神社拝殿（宝暦13年　1763）の扉等に受け継がれている。この彫物が極めて早い時期に関東からもたらされたことが注目される。また、中世の厨子に納まる弘法大師像は応永７年（1400）に当時北九州で有力であった守護大名・少弐氏に関連する山井氏によって作られたことが墨書から分かる。太宰府そして対外交易で知られる少弐氏が関わっていたことに注目したい。厨子の作製に関わった可能性もある。さらに、先に見た霧島神宮本殿の「龍柱」については、霧島神宮が島津家による造営である以上、琉球と島津家との交渉の中からが生み出されたものである可能性は高い。

以上のような九州の彫物の独自性をより鮮明にし、さらにそれを生んだ理由や背景を、彫物に関わった工匠等の活動から解明できないかと考えた。

２．研究の目的

本研究は、近世における九州の彫物の独自性が生みだされた理由や背景を、建築とその彫物、それに関与した工匠のみならず、関連が予想される仏像や仏具、厨子などの彫物やそれらに関与した仏師、彫物師にまで範囲を広げて考察して表現や技法の伝搬経路からを明らかにすることを目的とする。彫物に着目した研究はそもそも少ないが、本研究は、建物の彫物やそれに関与した大工・彫物師について考察するのはもちろん、厨子や須弥壇、仏像、あるいは仏具にまで範囲を広げて考察する点に方法としての独自性・可能性がある。

仏師が建物の彫物を担当した例は、関東でも日光東照宮の天和３年（1683）修理に京七条の大仏師・左京法眼康裕の例（伊東「江戸幕府の作事において彫物を担当した工匠の変遷と彫物大工棟梁の確立」日本建築学会計画系論文報告集 411 号　1990 年 5 月)、千葉県成田市の新勝寺釈迦堂（安政５年　1858）の胴羽目「五百羅漢」に仏師・松本良山の例等が知られる。近世中期以降には彫物専門の彫物師が登場するが、それ以前には、仏師等が建物の彫物に関わる機会が多かったとみられる。したがって、対象とする彫物や関与した職人の範囲を広げることは、史料の少ないこの分野にとって極めて有効な方法であると考える。

３．研究の方法

研究の方法としては、すでに手掛かりを得ている熊本県・大分県・鹿児島県の事例を対象に進めたい。熊本県においては、①湯前町の御大師堂の須弥壇の彫物の作者、賀吽を分析する。作品は熊本県湯前町・多良木町・あさぎり町に残される 10 作品が知られるが『重要文化財　八勝寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』2015 年)、彫物の分析はない。まず彫物の分析により、特徴を把握する。その上で、賀吽が「居住」した常州の調査を実施し、賀吽の常州における作品や活動を分析したい。そのために熊本県･茨城県における文献調査および実測を含む現地調査を実施する。具体的調査先の一つに茨城県桜川市にある真言宗・楽法寺を考える。中世から真言宗の拠点であり、正徳年間に活躍する彫物師・島村家２代円鉄を輩出した寺院であったためで、賀吽がこの寺所縁の僧であった可能性が高いとみるからである。また、②当地と中世における太宰府や少弐氏との関係がうかがえることから太宰府天満宮をはじめとする太宰府の文献調査および現地調査を、さらに、③熊本県北部にみられる「力神」の系譜をたどるために大津町および玉名郡周辺の、熊本県八代市の八代神社本殿のダイナミックな彫物の系譜を探るために八代市周辺の神社本殿の現地調査を実施する。

また、④大分県の柞原八幡宮の元和度南大門および祇園宮に関する文献調査および現地調査を行なう。さらに、⑤鹿児島県では霧島神宮本殿にみられる「龍柱」の系譜を琉球との関係の中でたどりたい。霧島神宮および周辺の「龍柱」をもつ神社本殿などはほぼ調査済みであるので、現地調査については鹿児島神宮などについての補足程度でよく、文献調査を実施する。

４．研究成果

九州における彫物の技術・意匠の伝播経路のうち、①熊本県湯前町・多良木町・あさぎり町で活動が認められた彫物師･賀吽による「関東常州」からの伝播経路を裏付けたい。

御大師堂須弥壇格狭間の「桃」

賀吽は、墨書から「権大僧都賀吽頼賀」等と名乗っていて、「賀吽」とのみ墨書される場合もあるが「賀吽」と「頼賀」は同一人を指すものと判断される。熊本県湯前町周辺の作品については、重要な先行研究でもある前掲『重要文化財　八勝寺阿弥陀堂保存修理工事報告書』に一覧表が掲げられている。これを参照すると、元亀元年 (1570) の築地権現の板絵に「筆者常州之住居賀吽房」としてみえており、最も時代の降るのは天正 13 年（1585）の槻木大師堂弘法大師像の彩色で「絵師胎蔵院頼賀」として名を残す。すなわち元亀元年～天正 13 年の 15 年間にわたりこの地方で活動していたことが判明する。また、天正９年の東光寺薬師像に「権大僧都頼賀七十五歳」とある。一方、同年の御大師堂の須弥壇墨書には「関東常州住賀吽 (花押) ／生年八九五歳」とあって、これを 8×9＋5 歳と読むのであれば、77 歳となって先の東光寺の記録ときれいに合致しない。いずれにしてもこの地方で、64（あるいは 66）歳～79（81）歳の高齢で活動していたことになる。「権大僧都」と称するので単なる職人ではなく僧であり、僧が彫物師、絵師、彩色師でもあったことになる。

御大師堂須弥壇格狭間の「獅子に牡丹」

球磨地方以外の地における賀吽の作品を、仏像、神像、仏画、厨子等に見出そうと、平田寛「九州の中世美術　－熊本・球磨地方美術調査概報－」（昭和 56～5 8 年度科学研究費補助金（総合研究 A）研究成果報告書）や『県内主要寺院　歴史資料調査報告書（三）（人吉・球磨・葦北・水俣地区)』（熊本県立博物館　昭和 59 年）等、あるいは中世常州における活動の痕跡をさぐるべく『茨城県史』他、寺社の修理工事報告書等も調べたが、残念ながら上記一覧以外の作品は見いだせなかった。

一方で、僧としての足跡を調査した結果、当初から可能性を見出していた真言宗・雨引山楽法寺（茨城県桜川市大和村）の初代山主吽永は、応永 21 年（1514）に、村上山観音寺二世の大阿闍梨で､その名も吽賀という僧から附法を受けていたことが判明した(｢天引山楽法寺山主略伝｣楽法寺所蔵)。ただし熊本で賀吽が活動したのは天正期が中心で、時代的にも離れていて対応しない。しかし、常州の範囲においては、管見では「吽」の字をその名にもつ僧は、この地方では真言宗の吽賀の法統につながる者しかおらず（『茨城県史　中世編』昭和 61 年　500 頁等)、やはり時代は降るものの賀吽も彼の法統に連なる僧であった可能性は高い。そうすると江戸時代の関東で極めて有力な彫物師であった島村家の２代島村円鉄（哲）がこの楽法寺の僧で、現存・本堂等の彫物も手掛けていること（拙稿「彫物大工・島村氏の系譜について」日本建築学会学術講演梗概集　1986 年）を合わせて考えると、賀吽の意匠や技術は、熊本にもたらされるとともに江戸時代の関東で有力な彫物師・嶋村家にも受け継がれた可能性が出てくる。

なお、賀吽の作品のうち熊本県湯前町の御大師堂の須弥壇の彫物については、やや詳細な調査を行った。須弥壇格狭間の秀逸な彫物がその作品である。須弥壇は、間口は当初のままであるが奥行方向には切縮められていることが判明した。格狭間の彫物は奥行方向に３枚あるが、向かって左側については、最も奥の彫物が、200 ㎜程度切縮められていることが判明した。おそらくこの堂本来の須弥壇ではなく、やや大きい須弥壇の奥行方向を、この堂に合わせて切断したのであろう。切断された彫物は、左に鯉、右に蒲の穂らしきものを表しているが、蒲の部分が切断されることになった。一方、向かって右側については、最も奥の格狭間が隠れるように右側に仏壇が増設されており、格狭間の彫物は失われていた。それがこの研究期間の後半で実施された修理工事で失われていた格狭間の彫物が須弥壇内部から発見された。「龍」の薄肉彫で、裏面に他の格狭間と同じ天正９年（1581）に賀吽の作であることを記す墨書が見出された。龍頭部はほぼ正面を睨み、大きく手前に伸ばして宝珠を掴む左腕を大きくデフォルメした表現は類例をみない。ただ鯉の格狭間彫物と同様に切断（左側）されて失われている。賀吽作品のうち修理工事を施された八勝寺阿弥陀堂厨子の彫物と、御大師堂須弥壇の彫物を比較したとき、後者のきわめて優れた意匠に対して、前者があまりに稚拙で、とても同じ賀吽の作とは認め難かった。今回の「龍」は構図が独自であったが、これに近い構図を八勝寺阿弥陀堂の厨子に見出すことができた。修理工事で施した彩色が本来の価値を損なった部分があると思わざるを得ず、修理工事の難しさも感じる。

発見された御大師堂須弥壇格狭間の「龍」

八勝寺阿弥陀堂厨子桟唐戸の「龍」

次に②少弐氏を介した大宰府からの伝播経路であるが、これを裏付ける直接の根拠を文献等からは見出すことはできなかった。現在大宰府において、彫物の多い文禄２年（1593）建立とみられる太宰府天満宮の正面側を飾る彫物を調査した結果、金柱上の４つの蟇股は、内部に梅紋等をもつが、これらは内法長押上にきれいに収まっておらず、足元下に支物を入れて洋釘止めしていた。また蟇股内側上部に円弧状曲線を５つ連ねる、蟇股内部の「蝶」はその輪郭部分から垂直に彫り込んでいることなどは近世にはないこと、さらに蟇股は通常であれば両面彫となっていてよいはずが、壁付の蟇股のように背面は彫られておらず、現在の本殿にそのような蟇股が取り付いていたと思われる部位もないことから近代になって取り付けられたと判断した。また、正面唐破風内の蟇股も形状は 19 世紀以降の状況を示し、周辺の向拝柱上の欄間等を含む彫物もせいぜい江戸時代のもので、作製年代が文禄頃にまで遡ることを積極的に示す根拠はない。本殿の両側面および背後の庇にも蟇股はなく、この木太く彩色も無い。彩色はともかく彫物についてはほとんどないのがこの建物の当初の姿なのかもしれない。このため残念ながら大宰府からの彫物の伝播経路を跡付ける根拠は見いだせていない。

大宰府天満宮本殿　金柱上の蟇股

大宰府天満宮本殿　蟇股足元（背面側）

③の力士の大彫物の系譜について検討する。元禄 14 年（1701）の熊本県大津町の中島日吉神社本殿の妻にみられる力士の大彫物の墨書から判明する大工の居住地は「山本郷」（現在の熊本県植木町付近）および「新大工町」であった。山本郷の大工の活動が期待される熊本市の北隣の玉名市で力士の大彫物をもつ神社建築が確認された。伊倉南八幡宮本殿妻蟇股の内部、伊倉北八幡宮楼門、繁根木八幡宮本殿妻に力士（あるいは鬼）の大彫物がみられた。彫物は元禄期の中島

日吉神社より写実性が高く、いずれも 18 世紀中期以降の作と判断した。すなわち、大彫物の源流を辿ることはできていないが、大彫物で飾ることの 18 世紀以降の展開を跡づけることができた。

また、「新大工町」の大工作品も見出すことができた。「新大工町」は、熊本城下町の外側、白川に架かる長六橋を渡った対岸にあった（『熊本市史』通史編）。益城町の宝暦２年（1752）の木山神宮本殿は「新大工町」の大工が関与した例である。素木で要所に彫物を施した神社本殿であるが、木山神宮本殿に力士の大彫物はない。ただし、妻の大虹梁の表面に華やかな渦・若葉を彫った欅の薄板を張り付けるという独自の技法が見出された。

中島日吉神社本殿　妻の力士の彫物

④の大分市周辺にみられる大型パネル状彫物の系譜をみよう。近世初期から柞原八幡宮南大門（元和 9 年 1623）の小壁の彫物や花鳥の彫物（5 尺×1.5 尺）や、祇園宮（現・弥栄神社）楼門（寛永元年 1624）に大型のパネル状彫物の使用が文献上認められていた。現在の柞原八幡宮南大門は重要文化財で、明治 3 年（1870）の建築であるが、この建物も「廿四孝」等の大型パネル型の彫物をもつ。伝統の形式を引き継いでいるのだろう。祇園宮（現・弥栄神社）楼門も初層にパネル状彫物が認められる。ただし、建物にうまく収まっていない。建物そのものが果たして寛永元年の建物であるかもやや疑問であるが、彫物は、さらに詳細な調査が必要ではあるが、江戸時代初期の姿をとどめている可能性があり、そうでない場合でも当初の姿を踏襲されていることになろう。また、新たに元和９年建立ともいわれる霊山寺山門（大分市）がその初層の腰羽目等に同様の彫物をもつことが判明した。源平の物語等を題材とする、当初からの可能性もある彫物である。この地域に大型パネル状彫物が江戸時代初期に出現する理由については今後も検討が必要である。

繁根木八幡宮本殿　妻の力士の彫物

霊山寺山門　大型パネル型彫物が入る

⑤鹿児島県および宮崎県にみられる「龍柱」については、やはり霧島神宮本殿（正徳５年 1715）の例が最も古く、鹿児島県の「龍柱」をもつ神社建築は、皆共通して角柱を残しつつ、瑞雲を伴って龍が柱に巻きつく形式であるから今のところ霧島神宮本殿で採用されたものが鹿児島各地の神社で採用されたとみたい。熊本県人吉市に慶長 15 年（1610）建立の青井阿蘇神社廊があり、虹梁の持ち送りが阿吽の龍の丸彫りである。しかし、龍は柱に巻き付いておらず、瑞雲は伴っているものの、龍そのものの頭部も髭ばかりが目立ち、豪快でダイナミックな霧島神宮の「龍柱」に対して、青井阿蘇神社廊の彫物は色彩が無いからばかりではなく、大人しく静的であって、両者をおなじ系譜上に位置付けることはできない。やはり鹿児島の龍は琉球や大陸との関係で考えられるべきものである。ただし重要文化財・八幡神社本殿（永禄２年 1559）の向拝柱を覆うように彫られた雲紋や、鹿児島・宮崎の一部の瑞雲を伴わない「龍柱」にも注意しておく必要があるように思われる。

霧島神宮本殿　　龍柱

以上のように全体に十分な成果が出たとは言い難く、想定した①から⑤の九州への彫物の伝播経路について既存の成果に若干の知見を加えたにすぎない。しかし、近畿地方からの伝播経路だけではなく、関東から直接九州へ、大陸や琉球から九州へといった経路を改めて指摘し、わずかながら実証したことが、優れた後続の研究へつながると考えたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 伊東龍一（写真：六田知弘・六田春彦）	４．発行年 2022年
２．出版社 川越氷川神社	５．総ページ数 111
３．書名 川越氷川神社本殿　江戸彫りの極致	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関